

“国際博物館学体系”出版計画短報

Short Report on “A Proposal for an International Treatise on Museology”

鶴田 総一郎*

Soichiro TSURUTA

1. まえがき

私は1979年9月17日から22日までの6日間、イギリスのレスターで開催された博物館専門職員養成に関するイコム・シンポジウムに出席する機会を得た。正式会議名は“国際博物館会議博物館専門職員養成国際委員会総会及び大学水準における訓練の方法とその技術に関するシンポジウム”で、この会議の経過と結果の私の要約は日本博物館協会誌博物館研究に近々イコム日本国内委員会記事として掲載される筈である。

さて、その折、つまり現地ではじめて、シンポジウムの後24日～25日の2日間、博物館学体系企画拡大委員会が開催されることを知り、かつユネスコのトルチェンコ室長等からのすすめもあって、急遽予定を変更して、これにオブザーバーとして参加した。正確には参加を承認された。かねてこの博物館学体系の成行きを注目していた筆者としては、願ってもない機会であったと同時に、学芸員養成課程を持つ大学が80校に及ぼうとし、博物館の数も1,600館を超えようとしている日本の、その博物館専門家がいかに無関係であるか（無関心を含めて）をいやという程知らされたものである。

そこで、この私の轍を踏まないでいただきたいためにも、当学会が日本にだけ通用する博物館学（当然“学”ではなくなる。）という弊に陥らないためにも、取り敢えず中間的な報告として、以下その経過と今後の見透しについて触れることとした。

2. 経過

1) まず“Treatise on Museology”の訳語であるが、直訳すれば、博物館学提要、中味を考えると、博物館学理論、国際的な体系づけを考えると、国際博物館学体系、でき上がった形を考えると、博物館学叢書などといろいろ意識できる。しかし1979年末届いた上述の委

員会の報告によると、どうやら“国際博物館学体系”あたりが、日本語として最もよく内容をあらわすものと判断されるので主題のとおりとした。

さて主題の国際博物館体系をまとめることと、そのために用意された“博物館人材の専門的養成のための基本要綱”が正式議題として取り上げられ、かつ採択されたのは1971年のパリ・グルノーブル大会・総会（第9回大会・第10回総会）である。これに先立って、1965年のニューヨーク大会には既にこの趣旨の提案がなされてもいた。しかし小生誠にうかつなことに、この一連の長期に亘る努力と経過を知ったのは1974年のコペンハーゲン大会の折で、しかも目下進行中（換言すれば、もはや体制が固まって傍から入り込む余地無し。）という話をイコム人物訓練国際委員会（当時の日博協訳。私は博物館専門職員養成を使うこととした。）の報告のまた聞きであった。つまり、1965年のニューヨーク大会の日本側参加者からも、1971年のパリ・グルノーブル大会のその誰からも、当時このことについて何の報告も無かったため、系統だってつかめていなかった。

もちろん1972年にイコムから出た同趣旨の“世界の博物館員専門教育訓練（日博協訳）”の原文は読んだが、この関係のことが書いてある冒頭記述は何気なく読み過ぎてしまっていた。イコム日本国内委員会でも、1974年末同じ標題のもとで“博物館専門職員養成のための基本要綱”のところだけを訳出している（博物館ニュース第7巻第11号）。しかし全く単発の扱いで、上述のような体勢でことが進んでいるなどは全く把握していない記事であった。

一方イコムそれ自体でも、この方向の努力に多少の曲折があった。その最も顕著なものは、1971年以降、この体系づけをケネス・ハドスンにまとめさせようというユ

* つるた そういちろう
法政大学文学部教育学科博物館学研究室
Professor of Museology
Faculty of Letters, Hosei University

原稿受理：1979年12月17日
連絡先（勤）
〒102 東京都千代田区富士見2-17-1
（電話）03・264・9349（直通）

ネスコの発想（正確にはわからない）に対して，ヨーロッパ大陸の多く博物館学者が，好感を持たなかったらしい。結果として，ハドスンにまとめてもらうことと，国際的規模での協同研究の結果をまとめようという方向が，ばらばらになってしまった。結局1974～1977年は，ユネスコの依頼によるハドスンの“1980年代の博物館”（Kenneth HUDSON: Museums for the 1980s, 1977年刊）の出版で終わった。なおユネスコでは，表面上は予算不足のためこれしかできなかつたと称している。

これに対して，1977年のモスクワ・レニングラード大会を契機に，再び国際版への要求が高まり，かくて，ベルギーの王立中央アフリカ博物館長クイパー博士を委員長とする国際博物館学体系計画委員会が再び活動をはじめた。この委員会はイコム博物館専門職員養成国際委員会と，1977年から新発足したイコム博物館学国際委員会から選抜された委員と，イコム執行部及びユネスコの博物館担当室長から構成されており，イコムの他の国際委員会（例えば教育文化活動国際委員会が要求する博物館教育専門員の専門性の主張との調整など。）との密接な連繋の下に，精力的に活動を進め，今日に到っているというのが実情である。

3. レスター会議の結果（要約）

1) 博物館専門職員養成のための基本要綱は，激しい改訂論があつたにもかかわらず，下掲の，ごく一部の修正を除いて，原案のままとした。理由は，世界の博物館職員訓練機関の再調査をして得られる新しい情報をもとに，全面的に内容を検討しなおす必要があるので，その調査の実施が先決で，現状での修正は無意味ということであった。また，要綱の形式としては，これで全く差し支えないということでもあつた。修正（原文のまま）

- 1.3 Role and importance of museums in the modern world → function へ
- 1.34 The public and its needsの下に加える
- 1.341 Individuals
- 1.342 Groups
- 1.343 Specialists
- 1.4 Various types of museums and study of certain present trends → current へ
- 9.55 Television showsの次に加える
- 9.56 Promotion and marketing

2) この出版物の基本的なねらい。

当初の目的である国際的な共通理論のまとめと体系づけは当然のことであるが，博物館機能の複合性と相互依存関係を十分に取り入れたもの（私流に言えば国際博物

館構造）であることとともに，博物館ごとのそれぞれの独自性，専門性及び需要が一方に蔽存し，さらにそれぞれの社会及び社会環境に応じたさまざまな在り方があるので，要するに国，民族，文化，社会，発展途上等の基本的問題を十分考慮した適応性の広い組織的な理論と実際の展開が特に必要だと考えられる。

3) この本の利用者層

7項目あがっているが，要するに専門グループに絞っている。もちろん図書館やマス・メディア関係の文化・科学・教育者もあわせて加えているのは当然である。

4) 国際博物館学体系の大項目

- ① 序論（目的と対象・自然及び人文遺産の定義）
- ② 博物館と社会（中項目以下略・以下同様）
- ③ 博物館と自然及び人文遺産
- ④ 機関としての博物館
- ⑤ 博物館の未来
- ⑥ 各論（概論に入らないケース・スタディを中心に。）
- ⑦ 文献
- ⑧ 索引，用語集，諸表類

5) 使用語 英語と仏語とで同時出版。他にアラビア語，中国語，ドイツ語，ロシア語及びスペイン語版を出版。

6) 本の構成は4巻で。

- | | | |
|-------|-----------------------------|-------|
| 第I巻 | 序論，博物館と社会，
博物館と文化遺産（その1） | 計400頁 |
| 第II巻 | 博物館と文化遺産（その2） | 計400頁 |
| 第III巻 | 博物館建築，博物館とその運営機構 | 計400頁 |
| 第IV巻 | 各論，文献，用語集，諸表類 | 計400頁 |
- 版 型 A4版 (21cm×29.5cm).
活 字 本文は10ポを原則とする。

ここまできて紙数が尽きてしまった。以下出版の責任全般をユネスコ。実務上の責任者はイコム。実質的責任体制は出版計画委員会を設置して委す（委員の選定方法及び数も決定）。著者の選定（ソーティングは済んでいる。）。版權の所在の確定。出版計画と予算及びその配分。出版方法の細目等々極めて具体的に決められた。

1980年からはじまる仕事を例示すると，1月に“Editor”の選任，2月に執筆者との仮契約，4月に出版計画委員会の第1回開催，5月にはコンサルタント及び専門家を特に委嘱して文献資料の整備。そして1980～1982年の間に完成原稿を。1983年には出版という予定になっている。